

第 44 回大阪大学野田村サテライトセミナー

コミュニティ・ラーニング報告会

大阪大学人間科学研究科コンポジウム

2016 年 10 月 11 日、野田村サテライトにて「第 44 回大阪大学野田村サテライトセミナー」を開催しました。今回のセミナーは、毎年 8 月にお世話になっているフィールドワーク演習の「コミュニティ・ラーニング報告会」として、大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラムの 4 期生が発表しました。また、大阪大学人間科学研究科コンポジウムとの合同開催となり、演奏を交えながらフィールドワークを通じた共生について語られました。

第 1 部は、最初に大阪大学人間科学研究科千葉泉先生の「オレ、オラ！—豊かな共生社会を目指して—（作詞作曲：千葉泉）」の演奏に始まり、参加者全員が歌を歌い和やかな雰囲気の中で始まりました。

発表の前半は 4 人の学生がお世話になった玉川、日形井、和野平、根井の各集落で体験した「共生の事例」を紹介しました。例えば、くるみの作業所やパティオムラタは、目的がなくても集まっている場、井戸端会議のような会話を通じた共生であると報告しました。また、のだむラジヲの活動は、目的をもって集まる人の共生の場になっていると感じたそうです。

発表の後半は、パネルディスカッション形式で進行し、4 人の学生がフィールドワークを演習通じて考えた共生について語り合い、「わかり合えないことをわかるのも共生ではないか」と感じたこととまとめました。また、今回、再訪して、村民のみなさんに再会できたことに感動し、野田村は、迎え入れてくれる場所だと感じた感想を述べました。

学生の発表に対し村民の方から「野田村のよいところはどんなところだと感じますか」と質問があり、野田村の人そのものであったり、美味しい食べ物があり地産地消できること、散歩できることなど、各人の視点で回答しました。また「地元の子どもたちは大きくなると都会へでてしまうが、何かアイデアはありませんか？」、「野田村を活性化させる地域資源として『柿の木』に気づけなかったか」などたくさんの質問やご意見をいただきました。

人間科学研究科の稲場圭信先生からは「フィールドワークでお世話になった方々や地域にお返しすることを考えていけないといけない」とコメントし、モハーチ・ゲルゲイ先生からは「フィールドワークは、行ったり来たりして、一度戻るからこそ考えられることがある」と述べました。最後に渥美公秀先生は「コミュニティ・ラーニングは、たった 10 日間という短い期間に 1 回だけ訪問する授業だが、4 年間継続してきたとで何か野田村にお返しすることができるのではないかと考えている。来年度のよろしくお願いします。」とまとめ、第 1 部が終了しました。

第 2 部は、しいたけを栽培している「のりたけ農園」に会場を移し、千葉先生をはじめ先生方全員と学生による即興バンドにより「ふるさと」や「満月の夕べ」を演奏し、賑やかに

再開しました。千葉先生からはフィールドワーカーがお世話になる地域の文化を大切に思う気持ちを伝えるための音楽の有用性について話され、当日のために作詞作曲された「野田村ノリタケ歌」を発表されました。この歌は、岩手県民謡「南部牛追い歌」の替え歌で、野田村の皆さんにも親しみのある曲です。全員が手拍子を打ちながら楽しく歌い、その後の意見交換が大いに弾みました。



学生による報告の様子



参加者が「野田村ノリタケ歌」を歌う様子